
虚空のランサー

逆坂 榊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚空のランサー

【コード】

N3998W

【作者名】

逆坂 榊

【あらすじ】

異世界SF架空戦記

たび重なる戦争によって大地を捨てた人類は、隣接して存在していた”もう一つの空”へと侵攻を開始する。

しかし、人の可能性を広げた未知の元素”フロジストン”に満ちたその世界には、独自の進化を遂げたもう一つの”人類”が存在していた……

未だ自分の未来すら知らぬある青年、真実を求め始める少女、全てを知って口をつぐむ者、それぞれが交錯する空、羽により飛行能力を持つ航空機動猟兵が空をかけ、真術騎兵が放つ雷が空を焼く。交錯する二人、異界の空で今闘いが始まる。

始まる世界（前書き）

あまり使わないつもりではありますが、グロ系の表現とかをこのんでつかうことが有りますので、

どうかお気をつけください。

始まる世界

成層圏の気は澄み切っている。人類史数千年の汚濁も絶対なる清浄圏たるこの高度まで登りきることは無いからだ。甘い、とそう感じるほど清浄な冷気を思いつきり鼻から息を吸い込んで肺の中のため込む。

すると燃え上がる新緑の香　精霊中を寄せ付けぬ為自然に放つハーブに似たその香　が鼻を抜け前進を静かに満たしていった。そしてもう一つの感覚も。

腹式の呼吸、深く、ゆつくりとした動作を意識して呼吸を始め、続ける。また一息、と今度は、冷水にも似た張り詰めた気、頬をゆるくなぞる肌を薄く裂く冷気が穏やかに伸びすぎた前髪を揺らすのを感じた。

今日はいい修業日和かもしれない。収斂されゆく意識、雑念が消え、唯クリアになった自身だけが有る感覚。

来た、そう思い、声を紡いだ。

「　みぎに出る者よ。灯籠を持って」

自身の内に何か渦巻いて行く感覚／語りかける言葉は静けさを意識する。しかし、決して小さくてはいけない。

「　ひだりに出る者よ。彼の物よ拍子を打て」

言葉と呼応して現れ行く何か／あくまでも語る言葉は控え目ではあっても、よわよわしくはいけないのだ。

「　我は行く。唯行く。何人も知らぬ先へ。どこまでも歩き行く。故に　、」

しかしてソレは、硬直し、その形を得ることが出来ない／故に　、言葉が途切れた。次の言葉を思い出せないのだ。故に　、何と続いたか。何と続けたかったのか。

『お前は一番にはなれない』不意にそんな言葉が浮かんだ。

駄目だ失速する。意識した途端集中は途切れて行った。自身の内に渦巻くソレが消えて行くのが分かる。急に惜しくなりソレをとどめようと意識をしたその時には全てがが終わっていた。

集中を失ったからだ、ゆっくりと傾いて行くのが分かる。

「いてっ」

身体は岩の上から、青々と生い茂る高域故の背の低い草花の茂みへと落ちていた。「ひゅう……なんてこった。姉気にまた怒られる」そうぼやきながらも身体についた葉を払いながら立ち上がる。

仕方ない、今日はもうこのくらいにして帰るか。

そう考えて彼がザクザクと足音を立てて彼の乗り物に向かって足を向けて行くと、

するとアツカニヤ鳥と目が有った。

空の世界においての迷彩効果故か、光沢のある城と蒼のけばけばしく光沢を持つ色合いを持つその鳥は、やや反抗的な視線を一度足元に投げやり、……つられて視線をやると其処には、幾つかの木の枝の塊と思しきものが踏みつぶされて散乱していた。しばし考え、鳥に視線を戻すと「ああ。つまり……作ってる途中だった、と言う訳だな」と得心が行った。

鳥はぐあくあとくちばしの中に見える犬歯をさらけ出して、けたたましい威嚇の声を叫び出しす。あまりのやかましさに思わず数歩を下がり始める。

「……まあまあ待ちたまえ貴君。私にも悪気が有ってやった訳ではないのだ。思うに貴君オスだな？ そうだろう？ 私も人間のオスでな。まあカワイイ娘を引っ掛けたいのはオスとして当然の出来ごとではあるが巢の事はしょうがない、諦めてくれたまえ。不運な事故だったそうだろう？」

同意を求めるようにして彼は大仰に手を広げて見せて、鳥を伺った。彼、はいまだ親の仇を見るような視線をさながらビーム光線の

ごとく照射し続けていたが、怪訝な、と表すべきか。明らかに浮いた存在である眼前の存在を見てまだ判断を付けかねているという風情だ。

「まあ生きていればそんなことは往々にしてよくある事だ。つまり、気にするなと言う事だ。おっと、そんな顔をして睨んでもだめだぞ？ 俺は美味くないからな。おいおい本当に止めてくれそう言うのは。……そう言えば君ら雑食だってな。色々な物を食べると言うが。そう言えば貴君、無く時がアがあと鳴くのだな。私からするとそれがアツカニヤと聞こえる奴の耳が知れない。いや忘れてくれ、独り言だ。本当だってな、よしよし。我々は友達になれると思うんだよ。本当の所を言うとするならな。え、何なんでそこでもう一度威嚇する。うん？」つられ、下を見る。

そこには明らかに完成しているとみられる木でできた器上の何かがあった。……ただし何者かによって滅茶苦茶に踏み散らかされた。「ああ、つまり。そのなんだ？」視線の中アツカニヤ鳥と呼ばれた鳥は、その翼を広げ、その時として数メートルに達すると言われるその翼を広げ、

「
ッ！……！」

啼いた。

「ああ、成程。私から言うべき事は一つだ」

彼は大きく後ろに踏み出し　しかし、

そこには崖が有った。

「過ぎた事は気にするなだな」

途端、怪鳥は翼を広げ、その犬歯の覗くくちばしを突きだし、覆いかぶさってきた。

反射の反応で彼は足を崖の外に突き出し、「……！」身を沈める。瞬間、頭上を通り過ぎるのは突進の勢いと、ガチガチと硬質な音を響かせてかみ合わせられるくちばしの音だ。

あわて手だけで崖にしがみついた故の、足元から尻を抜ける不穏な空虚感をしり目に、何とかもう一度崖の面にとりついた時思ったことは、助かった、という事だった。

かみ合わされるくちばしの音は後方へと遠ざかり、徐々に下へと消えて行く物である事は今現在、確認している。「ひゅう……諦めてくれたかな？」普段の彼ならこうとでも言う期待はしかし一瞬で裏切られることとなる。

彼が肩越しに背後を伺おうとしたまさにその時、

「

ッ！！！」

高音が真下から襲いかかってきた。

慌て振り仰ぐ暇などない。

微かにとらえた遙か眼下に見せる雲を背景に、アツカニヤ鳥のその巨体が猛烈な直進の速さで此方へと真つすぐと突き進んでくるのが捕えられた。

行動は反射的という物だった。

脊髓反射、と言ってもいい。

両方の足を崖の垂直に切り立った面に押し当て、強く踏ん張り。背泳ぎのスタートのように身体を一瞬そらせると、「くッ……！」彼は手を離れた。つまり、身体を中空に投げ出したのだ。

瞬間、世界が反転した。一面の、それこそ完全に一面の蒼の世界においても上下とは存在した。上方から光は差し、そして物は下に

落ちるという意味で。

「……………うっ……………クウッ！」

しかし、そこには何もなかった。崖では無い。当然山脈等が見える訳でもない。そこにあつたのは、ただどこまでも続いて行く無限の青の虚空であつた。

空中で一転し、落下の体勢を整える。しかし彼に飛行する手段は無い。彼は自身の落ちて行く先を再度見た。高度にして数千から数万、ソレだけの距離のある空だ。そ

して、そこにタユウ、中空に浮かぶ大小高低ある島々だ。

続いて彼は考える。手はある、と。懐にしまつてある幾つかの種類の符、ソレを意識して。

上方の薄青から徐々に下方へと進むにつれ微かだがグラデーションが存在する為、この世界においては上下の確認はソレほど難しくない。

彼はすぐさま体勢を立て直し、しかし眼前、落下と共に発生する暴風をもろに受け、肺の中の酸素を軒並み持つて行かれたように感じる。強すぎる暴風が呼吸をすら困難にしている。咄嗟に手元から取り出した一枚の符が無数の光のラインが、呼吸を補助するマスクのような効果を発動。顔を覆い尽くす。

眼前に島の姿がその大きさをマシ、細部が確認できるようになつて行く。

彼は懐から出した、”緊急用”と書かれた赤い札を抜き撃つと、下方に向かって投げつける。すると札は一瞬空気抵抗を無視して下方へと前進したが、次の瞬間猛烈な光の乱舞と共に薄透明の全長の薄い円錐形の落下用パラクッション　クッション効果を兼ねたパラシユートが開き、彼の身体を抱擁。

足をかがめ、手を顔の前に用意し、対シヨック姿勢を整えながら幾つか連なつた離島の淵を目指して落下の方向を調整。

……………行ける。

その判断が安どと共に意識のフチに上ったその時。

「

ッ！！」

啼く声が薄透明のパラクッションを揺らした。

二度目の突進をかわされた時、彼の内に有ったのは苛立ちだった。本来この超高空の領域においての狩獵者として、最上でなくともそこそこの猛威をふるう自身の力への自身が覆されたという事が屈辱だったというも有る。

しかし彼にとってこの次の繁殖期が大事な時期だったと言う事が一番合った。脳裏を流れる早馬のごとき回想、兄弟達から酷い

目にあわされた幼鳥期、次々と同輩たちが次々と婚約者を見つけて行く中で失敗続きだった独立後の求愛のアピール……ッ、ああッ……

……！

と、人間ならそのように独白してべろんべろんになるまで酔いっぶれた事間違いない心境に彼はあった。

それゆえに、と続けて彼が人間なら思つたらう。

……この屈辱は、貴様をデイナーにしておいしく頂戴させてもらつたうえでかわいこちゃんを捉えた後の晚餐用に干物にして長期保存してくれるわ……！

と。

そして彼は知っていた。この生き物には羽は無く、くちばしははねのける力も無い弱者であると。

だからこそ彼は焦らない。

悠々と縦に一度旋回すると、真つすぐ落下を続ける獲物を目にとめる。

形取る姿勢は翼を半ば折りたたみ、身体の横に配置する構え急降下に高い適性を持つ体勢である。

そして行った。

高速で抜ける風が空力を配慮して形作られた自身のくちばしにより整えられ、後ろへと続く身体が通り抜ける隙間を作り出す。耳元を抜ける風に呼応して弁が閉じ、無音とがす。もとより高速の機動中にあつては役に立たない物だ。

ああ、と彼は思っていた。

気持ちいい。そして得るだろう私は。眼前、直下降の構えを見せ、しかしソレに適さない身体で有るがゆえにただ、落ちる、その陰を見下ろし、すぐにその姿が大きさを失くしていくのを彼は感じた。

重量故か、その陰が落下する速さは早い。しかし、

「爆ぜろ！」

声と共に、薄透明の膜の一部が消し飛んでその軌道を変える。その軌道の先、眼前には明らかに幾つかの離島が有り、……もしこのまま進めば相対的な速度の差で、島に激突し、自分は命を失うだろう。

「うしっ！」歓喜と分かる気配を胸に、

その事実を確認した彼は即座にその透明の笠の背後に回り込み、くちばしで食いついた。

「な」

そして犬歯でもってすりつぶすように擦り合わせ、笠の結界を破る。同時、ねじった首の動きに応じ、笠の機動が変化した。島々の中央を抜けるコース、島々を紙一重ですり抜けるコース。

ガチガチ、と脅迫的な響きが耳をたたきのめす。

背後から来る衝撃はまだましな方だった。

予想外の知能を発揮して背後に食いついたせいで笠の描く機動が変化し、幾つかの島を結びつける幾つかの鳶の橋を叩きつぶし、微かに減速を繰り返しながらしかし、

「抜けた……だと!？」

その幾つかの島の連続体を抜けてしまった。

振り返る背後にはいまだ暫くの間島と呼べる地帯は無い。仮にあつたとしてもその時に同じ手段での減速と着地が可能だと言う保証はない。

反射で最後の切り札と言える符を投げようとして、思いとどまる。……コレがまさしく最後のチャンス。二発目は無い。確実に当てられるチャンスが居る、と。

しかし尚、圧倒的大音量を持って迫る圧迫感、背後笑いの気配すら漂わせて、勝利の咆哮を啼いている捕食者。

「万事休すともいいたいわけか……、だが！」

彼は歯を食いしばり前を見た。

空を飛ぶこともできず唯落ちるこいつは、もう一つの仇、ヤツラにも劣る単なる餌に過ぎないのだと。

終われ、その思いと共に彼は最後の加速を行った。

突如として彼のくちばしの先に、光のラインが縦横に彼を多い、円睡形の光の帯を作り出したのだ。彼がくちばしの先に感じる空気の圧が減少する。そのラインは明らかに彼の突進を補助していた

そして、トドメとばかりに羽の風切り羽として付随する上下の羽が一瞬大きく膨らんだかと思うと、折りたたまれたソレを背後に投げだす動作と同時にその羽は大量の大量の空気を背後へと蹴飛ばす。同時、光が乱舞しショックコーンさながらの光輪を空間に置き去りにし、身体が加速した。

いける、という確信。

事実として獲物はくちばしの前に迫り、その先が相手の肉を掴もうと大きく開かれ、彼の獲物が一瞬此方を振り仰いだ気がした。関係ない行くだけだ。

真つすぐと伸ばされた首が掲げられたくちばしが相手を捉え、しかし逸した。

代わりに彼の微かに上方に位置する者が居た。

舐めるな！

種族を超え、空間を超え、確かにその思念が彼の心を貫いた。すぐ背後、ソイツは言った。

「みぎに出る者よ。灯籠を持って」

「ひだりに出る者よ。彼の物よ拍子を打て」

弾む息を整え、祝詞は続く。彼の内、少なくとも先刻までの回避による疲労は莫大な物が有ると言つてよかつた。必殺のくちばしが手前まで迫つた時、彼は一瞬掌に光の束を生みだし、ソレに身体をぶち込む事でその身体を瞬間的に減速し、その攻撃を回避、相手の上方に達したのだ。しかし、彼の内の力は既に大半を失い、しかしその補給を行うことも既に至難と言える状況に有つた。意識は乱れ、唇、耳、指、各部の末端には既に痺れが来、思考は霞みがかつてきた。しかし、

「我は行く。唯行く。何人も知らぬ先へ。どこまでも歩き行く。故に、」

なさねば終わる、その思考が彼を未だ彼自身至つたことのない集中の領域へと導いていた。

「私は行けるのだ。どこまででもッ！」

祝詞は終わった。と、同時に彼の周囲を流れる大気が変化していた。暴風として彼の前を訪れるはずの光が、むしろ率先して彼を光を持つ風の流れの中に誘導し、彼の前方、落下方向に、流星にも似た光の煌めきを形作っていた。

「行けよ……！」

つばやきと共に二つに弾けた光が彼の両脇に散り、そして再度形を持つ。車輪にも似た二つの輪が彼の後方に生み出され、大量の風と共に光を放つ。

空に流星が生まれた瞬間だった。

ハンターとして無類のプライドを持っていた彼はしかし、今日初めて知る物を持った。

世界を埋める光の瀑布。

依然として彼の身体はしなやかで強靱な構造を有していたし、空においての圧倒的な戦力は相も変わらず他を圧していった。

空すら縦横に舞えぬ、弱きものはずに翻弄され、追い切れぬ屈辱。

唯一つ、彼に生じた変化はしかし、彼の一生を決定づける類の物だった。

ふとしたした油断、そこに付け込んで、撃ち込まれた光の札が舞う早さは縦横にして無尽。

本能が予期せぬ衝撃に悲鳴を上げる中、しかし脳裏に響いたのはその予想を反する物だった。

『 気に言った。私と組まないか？ 』

フロジストン
燃素障壁を超える風はある程度熱を持ち、冷氣という言葉を大気から奪い去っていた。しかし、彼女は思っていた。重労働には、肌を薄く焼くあの高空独特の空気が物欲しくなる……と。

「 あら、今日はいいい洗濯日和ね 」

今日は沢山仕事をしないとイケない。手狭な緑の空間を切り取って作られた自作の野菜に果物に水をやり肥料をやり……、それから。

そう思った瞬間に足にまとわりついてくる物が有った。

「あら、ラッキー？」

バウと吠えて足元にじゃれついていたのは黒と茶の毛並みを持つ膝程の高さを持つ犬に似ていてカワイイ。

言って覗きこんだ先にいたのは、一頭のキマイラ。見た目は茶色短毛種の犬という生き物に似ているけど、この子は空の生活に適應してフロジストンを取りこむ能力を移植された生物。頭をなでてあげると、喜んで鼻面を押し当てて顔を擦りつけてくる。

「あらあら、いけませんよ？ そんなにしてくれても、お菓子はお仕事の後ですよ、ラッキー。まて」

言つと、高い哀愁を誘うような声で顔を伏せたりしています。かわいそうですが、子犬を飼うのと同じですよ。

「だめな物はだめですよラッキー。さ、まずは畑仕事から頑張つてやりましょうえい、えい、おーですよ」

いつて手を挙げると、楽しくなってくる。バウと答えるラッキーも心なしに笑っているようにも見える。戦争中と言う事実が嘘みたいだ。

ラッキーの走って行く先、緑色のやはり遺伝子を書き換えられたキメラ、植物系の農奴ゴーレム達が手を振って此方に答えてくれる。知らず、微笑みながらも一度手を振り微笑み返す。

この星は滅びを迎えていた。例えば、ある国家の人間が一日に食べるパンよりも多数の兵器が、場所を選ばずその国家中でまき散らす無数の汚染物質。それは確実にその地に住む人々の身体と環境をむしばんでいく。一部企業による寡占と横暴は既に国家と言う枠組みを超えて戦争を続けさせ、人々は最早その泥沼から足をぬぐう術を失い、そして 人は空に逃げたのだ。

見渡す果て、どこまでも続かない小さな箱にわ。飼い犬がそこいらを駆けまわり、何体かのゴーレムが丁寧に整える、大気のをまとったトマトやナスの紫や赤や緑の様々な色彩、そして……いまここに一人の少女が居る。

脈々と並び続ける畑の風景が続き、しかしソレは途中途中で青によつて途切れている。見渡せば誰もが気づくだろう。この島の異常な小ささを。十数人の農業系キマイラ達と無数の動物系キメラそして、たつた二人の住人。ソレだけがこの島で暮らせるギリギリの人数だったし、あの子は決してそれ以外をこの島に踏み入れさせようとはしないだろう。この 中空に残された数少ない、文字通り”島”の上に。

そこは空の世界だった。

自由へのあこがれ。平和への渴望か。かつて空を目指した人々は、しかし見知った空にもう一つ別の空間が有る事を見つけた。踏み込んだ人の可能性を押し広げる未知の元素、フロンストーン燃素で満ちたこの空の世界へ。

すぐ真横に感じる積乱雲の山脈を果てなく続く大地と例えるなら、今ここに有る小島は南海の海にひっそりと隠された楽園だろうか。

揺り籠。

これ以上ないぐらい丁寧に温度管理された温室。

……ありきたりですが、そのような物であるきがしますね。と考
え、そういえば 思考を続けた。

「この風景、何か足りない気がしますね……」

彼女の足元に戻ったラッキーが、一度小さく吠え、湿気ったタオルの籠を揺らす。

「あ」

と思います。

同時、髪を強く吹き流した薄寒い風が、淡い薄ピンクのブラウスの裾を波立たせ、次いでふわと帽子の白を ソレを追う彼女の視点を、天頂へと導いた。地上では決してみられない風景、 行く数十の孤島を散らした、本物の青の空。

「そうだ。……今日は帰ってくるかな。あの子」

孤島に残された一人と一匹は風に揺られいつまでもそこにたたずんでいた。

始まる世界（後書き）

どうも

作者です

どのような事を書けばいいのかわかりませんが、というか

そもそも本編の部分が六に進んでおりません上に、

今のところ、まったく人名も人間同士のからみも今のところ有りませんが、

拙文ではありますがもし幸運にもお気に召しましたらまた

人々の日常（前書き）

悲しいかなまだストーリー出だしなんですよね

なるべく素早くアップするつもりですが……

……というか今回説明パートに時間をかけ過ぎているような

それとミス直しました

しかもこれから何度でも伸びて行くような……

人々の日常

雲中。光すら刺さぬ白とも灰ともつかぬそこでは、左右はおるか、上下の感覚さえ判別できなくなる。

しかし水蒸気の中をそれらは飛んでいた群体は、そうでありながらしかし一つの意思に統率され、それらの統制は固い。やや鋭角の三角錐、その頂点を前方に今もなお進行を続けている。だが時に乱流と化す雲中の気流は、時に彼らの戦列を乱すこともある。今、一騎が横合いからの殴りつけるような剛風にあおられその体勢を崩す。

「くっ……！」 猛烈な湿気の海が、刺すような冷氣と共に顔面を襲う。

瞬間、その群に緊張が走った。

なぜなら彼らにおいて、雲中での陣の崩壊は取り返しのつかない致命となるからだ。

彼はヒリついた喉に、唾液を嚥下することで一瞬浮かんだ、目標喪失という予感を振り払った。眼下、白雲の中に薄く映るのは比較的常温に位置する雲中に有って時たま生まれる極低温の気流。巻き込まれば即、死。或いは遭難という緩慢なソレを訪れさせる種類の物だ。雲の中の幽霊に、足を掴まれたらもう終わり……子供ならだれだって聞かされるそんな脅し文句を何とかして押しのけて行く、しかし、群体の前方部。遭難を避ける為のベテラン勢が彼の方を伺っているのが見えた。

「大丈夫か？」

温かみのある落ち着いた声。見知った声だ。

「大丈夫です、フェイ卿。行軍を続けて下さい」

「……そうか。だが無理はするなよ。いくらエイワスのお前とは言え、初めて白壁を超えているんだから」

振り返ると、どこことなくこわばりを持った表情が一樣に此方に共感の意思をあらわにする。幾つかは批判的な鋭いソレだったが、少なくとも幾らかの安堵感が身体の芯を温め、指の先、足の先、といった各部末端に血が通っていくのを実感した。

「フエイ、問題が起きたか？」

「大丈夫だ。少し新人が機動を間違えたただけだ。このまま行けそう
だ」

言つて見知った顔が前方、三角錐のその頂点。グラン・ヘッドのすぐ後方の位置にだ。

嘆息して、自分自身の至らなさを思うと、

「あんたバカねえ。何やってるのよあんた。キャハハ。あんたバカ
？」

バカバカうるさい、と思う。

「わかつてるよ。さっきのは少し風で”羽”が揺れただけだ」

背後からやはり見知った声。濃密な水蒸気越しに微かに見える、落ち着いた紺の目と髪。そしておせっかいな表情。脳裏を抜けた過去の仕打ち。思わず震えていると、他、追々周囲から声がかかる。

「「マルスおまえだめだなーまったく」」

「うるさいやい」

輪唱する二つの声。ソプラノ、ただし蜜のように甘ったるい。クスクス笑いの二重奏。

脳裏に薄青い光沢のショートカットといたずらな二対の瞳がくるくると遊んでいる。

「お前たち。遊ぶのもいいかげんにしろ」

続いての声は落ち着いた針のある声。微かに前方から聞こえてくる。どこにいるかすら分からないが、向こうは此方をきっちり認識しているらしい。最年少の騎士レオン、少年らしいはりと落ち着きが奇妙に同化した声。これで年下とは信じられないよな。

「だって、」

「だって何も有るか。よく前を見て物事を考える。 見ろ、もう少して雲を抜けるぞ」

言つて視線を前にやると、つい先ほどまで上下すら分からなかつた空間に、明らかな変化が生まれていた。

進む先、つまり前方に光とも見える色彩の変化を認められるのだ。グランヘッドのすぐ後方。フエイ卿が叫ぶ。

「目標までは後少しだ」

ついにきた。

歯を食いしばり、手の中にしまいこまれた一振りの槍を薄く握り込む。

覚悟が恐怖を高揚へと変え、やがて来る明らかな闘いへの予感を与えた。

「ただ 前へ！」

「ただ、前へ！」 「知らず唱和する声が幾重にも重なり会いそして、

雲の壁を抜けた。

この辺りの季候上、この辺りは年中雲の覆いによって守られている。そのため通常は特殊な機械による雲中航行術や、内部からの招き入れが無いと中々ここへと入ることはできない。 この先、空中にそびえる町へとは。

爽やかに乾いた大気の中、延々と続いてゆく雲の大地を眼下に、一匹の鳥が陰を刻みながら町の方へと流していく。その全長は数メートルにも達し、光沢を放つ青と白の彩色は、その身体の後方に自

然の物ではないと理解できる円盤、車輪と形容できる物をひきつれている事を除くとその鳥がこの大空の世界の覇者である事を見る物に伝えていた。更にアギヤギヤと不満げに啼く、そのクサクサとした態度を除けば。

「おうサナテスク！ 何やってんだ！」

無線機から低く響いた声が流れる。

その鳥の背には独特の光沢が有り触れる分には心地よい羽毛の布団となっていた。その布団からのろのろと這いだしながら、サナテスク、そう呼ばれた青年は顔を上げる。

「なんだ、”果物屋”かね。スマンが私は今眠くて眠くてしようがなくてな、先程無茶をして、だから今は眠らせてほしいのだが……。所で貴君どこにいる」

そう言った瞬間上方から変わらず射し続ける太陽が一瞬陰った。

そう思った瞬間、剛風と共に鳥のすぐ真横に一つの木製の船のようなものが落下してきた。

そのシップの表面は木製で、やや光沢を放つその色合いはこの高空の世界の者であることが分かる。そして横合いに付きだした二つの羽に似せた布性の翼と、屋形船のような意匠にまとめられた船の外装の屋根の部分にはただ一言、木製の部分を一片たりとも許さぬとして”大漁”の二文字が踊っていた。

和風の意匠にある、漁と書かれた部分の四角の部分が横に開き、中から赤茶色の短髪と髭で顔を彩った男が姿を現した。白いワイシヤツを窮屈そうに着こみ、薄い傷の縦横に走る微かに赤みを帯びた白人の体軀を窮屈そうに窓から突き出している。

「一年ぶりだ。サナテスク。もう少しわしを高く見てくれてもいい

ぞ。元気にしていたか」

「フ、コレは小生　私のデフォルト設定だ。　久しいな、調子はどうか」

「なかなかだ。どこも物資不足でな。儲かるとるよ。せつかくだ、姉さんの為にも果物を幾つか持つていけ」言つて指差した先、甲板の上には幌越しにガチャガチャと音を立てる荷物が積まれている。

「しかし今日は珍しいもんを連れてるな」

「中々いいだろう。実はつい先ほどコイツを捕まえて、小生のファミリアにした。カワイイだろう。背中の寝心地とか最高なのだぞ」言われ青年を背に乗せる青白鳥を目にし、その波打つくちばしから覗く犬齒らしきものを見せアギアギヤと反抗的に泣きわめく姿を目にし、「どう見ても獣系だろうに……」と漏らした。

「しかし、アツカニヤ鳥をか。この辺りには”ヤツら”も中々来ないと言つのに、命がけだったろう。やはり、姉さんの時見たく餌付けしてファミリアに？」

「いや。こう見えても小生、もう少しまっとうな手段を講じたぞ。

貴君行かん人の人間性を疑つてかかつては。私はまず命がけでこ奴をある芸術的にビュートイフォーな術式で……」

「待て待て待て待て。　試しに一息で言ってみろ。お前いらんところまで長いからな」

「フム。了解した。では少し待て……」

一息吸い、

「色々あつて町の外の孤島にて修業中だった小生は千変万化無垢にして天衣無縫たる我が神聖なる術式を改めて強化するべく新たなる”アイコン”の術式に関する修業をしておったのだが如何せん色々な悪条件が重なつて集中力を欠いておつたのだがそんな折ふと気付くと私は何やら見知らぬ鳥の主権領域を侵しておつたようで当然悪意などない清らかなる身分の私は意外なほど静かにかつ冷静に彼の説得を試みたがいやその彼というのがこの彼の事なんだがなしかし短

慮は行かんままったくたんりよは熟考すれば別に知らんがともかくこのこにくたらしいこ奴の追撃によってあわやここまでかと思われた所不意に訪れた集中の時間の中でこ奴に対して至近にて新術式が完成しあわやにげだそうとしたこ奴の背中を奪い取りかようにお縄に付けたと言う訳だ。……んん、どうした果物屋。何故頭をかかえる？」

「……いや、まじめにやっとなるんだろうなあと思って憐れんでおつたのだよ。貴様を」

「はっはっは」

「お前その根拠のない自信と誇大妄想で命を落とすぞ」

「結構結構。それで本望だ」

頬を釣り上げ、不敵に笑いながらこう言った。

二人がもう少しを進むと、雲の中に一つ、ぽっかりとやや沈み込んでいる所が有った。

それは町だった。中央の小高い山を中心に、放射状にメインストリートが走り、それぞれを補完するように網目状に通路が入り組んでいる町。家屋等にはレンガ色の石や大理石、アスファルト等が使われ、全体的に西洋系の建物が中心にその街並みを形作っていた。しかしその風景を奇異なものにしているのはむしろ二つ。

まずその街全体の上部やその周辺に、幾つかの巨大な岩が鎖等で引きとめられており、それぞれを結ぶ連結帯をロープウェイ等が走ってそれぞれの通路をつないでいるのだ。

その幾つかの浮遊する巨岩にはそれぞれ特色が有り、全体を植物や苔の緑で覆われた物や、一つ巨大な宮殿のようなものが鎮座する物も有る。そして第二に、ぽっかりと浮かぶ街並みを支える巨岩、小山、ソレ自身が中空に浮かぶ巨大な浮嶋その物で有ると言う事だ。

壁面に形作られた幾つかの階層状の構造部分には、滑走路としての機能を持つ港が常時展開しており、そこから主に多数の連絡船が

外部へと発着する構造になっている。

それらをごく当然の物として見やり、彼らは進むのだが。

「サナ、お帰り。今日のご飯は焼きとりかい？」

「サナ、いい加減借りた金返せ！」

「サナ、弁当買ってけ！」

「シカトすんなコラ！」

とそれぞれがそれぞれに勝手に言葉を放つ。ある者は艦船型の航空艦の甲板から、ある者は個人用の航空スクーターから軽快に声をかける物も有り、ある者は高速巡航用の屋台から投げかけられることも有る。

サナはそれぞれに「わはは。実を言うところの私が食われる所だったのだがな」「断る」「ひとつくれ大将」「だが断る」と、それぞれに回答を繰り返しながら市街地の上空を飛ぶ。

市街の上空にはやはり航空用のスクーターやバスが飛び交い、それぞれがそれぞれの目的を持って交通という物が完成していた。

「サナテスク。お前、中々顔が広いんだな。見直したぞ」

「フツ、果物屋。今更媚を売っても、遅いぞ。小生意外と人間に持ててな。困っちゃうくらいだ」

「単にマスコットキャラクター扱いされてるだけだろう？ わし知つとるぞ。お主、この町に来たばかりの時に、人間関係で随分と苦労しておったじゃないか」

「フツ、昔の話だ。小生あのころは自分のキャラクターをまだどう打ち出そうか分かっておらなんだ。消して貴君のおかげではない」

「おいおい。わしはお主達の為に預けられた宝石等を金に換え、一等地に家を与え、使用人を手に入れて、やった。その上あの家に引

きこもろうとするお主を皆に引き合わせ、輪の中に入れるようにと手を尽くしてやった。わしのやった事はお主から褒められるような事をしたと思つとるがね」

まあ確かにな、とつぶやき口元に手を当て考える。そうして考えた末に彼は言った。

「よしよし良くやった。褒めて遣わす」

「……」

果物屋は拳を振り上げ、サナテスクは身体を少し引いた。

「……ニヤロウ」

「ハハハ。ちゃんと褒めたではないか」

果物屋は、一度もう一度拳を振ろうとして……、しかし頭上を抜けて行く幾つかの陰が生み出した気流に体勢を崩し、慌て船の操作に意識を戻す。

一方サナテスクは自分の下のアツカニヤ鳥がグエグエと非難めいた叫びをあげるのを耳にしつつ、その幾つかの陰の航跡を目で追う。その陰は総じて有る程度は人に似た姿をしていた。二機の、内部に人を取り込んだ構造ゆえに三メートルから五メートルほどの巨体とソレに随伴する背に羽と飛行よう簡易のスーツ集団。

知らず、果物屋はつぶやいていた。

「航空機動猟兵に航空機動外装骨格に航空機動随伴兵。飛ばすなあ

……。あの娘達も、今日も飛んでノンのかね」

「ああ果物屋よ。年下を相手に貴様とうとうロリコンにでもなったか嘆かわしい」

「やかましい。昔あの姉妹の面倒を見てやったから気になっただけだ。聞いた話だと、事務部に配属されたとか言う話だったんだが、知らんか？」

「……定期的に話す仲ではある。がしかし、それ以上立ち入った話はありません」

二人は沈黙の内に、空を眺めた。二機の巨大なシルエツトが虚空を蹴り、風にまぎれるエンジン音と共に消えて行くか向こうへと消えて行く

く。
かなたへと消えて行く残響に耳を澄まし、果物屋は静かにこう言
った。

「自警団、か」

……今下を抜けて行ったヤツ達、まさか……。意識が向かいかけ
るが、慌てて息を一度吸い込んで「……ツツ」そしてゆっくり吐き
出す。

フロジストンと酸素の吸入を補助する補助器が生み出す呼吸音が、
何度となく自分自身の焦燥を彼女に意識させる。踏み込んだフット
ペダルに応じて、機体の各部に設置されたスラスタに火が灯り、
機体を急速に前進させる。同時に胸に違和感。見栄を張らず、
もう少し小さめのブラジャーにすればよかった。

機体に用意された接触回線が開き、スカウトとして機体の傍を飛
行していた航空機動猟兵 全身に白と青のプロテクターを装備し、
背に縦長の六角形の浮遊機関と小さめの羽を背負い、腰にランス・
ガンを差した姿 がハンドサインで耳を叩く。

『聞こえているか、エコー、向こうさん、Aチームへ教官チーム
』は既に準備が整っているらしい。今回の空中戦闘機動訓練は、所
定のポイントに到達と同時に開始する』

「了解しました、中尉殿。気を引き締めます」

『中尉殿はよせ。今は副団長だ。おい操縦担当、電子戦、火器管制
担当。後三十秒程度で会敵だ。手加減はせんで。集中しろ』

「了解しました」

『もつとフランクにしてもいいぞ。航空機動兵科は身体に力が入っ
ては本領が発揮できん。よし命令だ、極力リラックスしろ』

事務的にたんたんと言葉を進めたがる癖に、妙に冗談を飛ばした

がる銀縁の眼鏡と鋭い目線を思い出し、苦笑と共に了解とだけ答え、HUDに目を移す。機体のコントロール画面を呼び出し、手元に格納されていたコンソールを叩く。三次元ディスプレイが空中に自機のシルエットを描き出す。

構造としては縦長の構造をする菱形の機体。左右から張り出した腕部と、背に負った菱形のフロジストンを利用した浮遊機関、機体下部に懸架された武装コンテナを見ると遠目に見ると機械でできた蜂、あるいは上腕部だけをみれば姿勢の悪い人型ともとれるだろう。その機体の複数の部位に用意された人員輸送用のグリップとワイヤーに鈴なりに結びついた仲間たちを目に、再度気を引き締める。

「予定の航路を終了。火器管制を……ええいまどろっこしい。沙耶・エイワス、銃の操作とか面倒だから、バックアップお願い」

「アイハヴ、えっと機長　奏お姉ちゃん、いいのかな？ ……こんな適当で」

背後から聞こえる、沙耶の柔らかな声。あ、頬が緩む。平常心平常心。

懸命に鉄面皮を構築して振り返る。きつと毎朝見る、きつつい私よりずっと柔らかな”私”がいるだろう。振り返る。

「べ、別にいいのよ、沙耶。どうせ、こんなデカ物、航機外骨、私達しか乗らないし、乗れないんだから」おずおずと切り出す、「が、ガイコツ……？　でも。こう言うのはちゃんと規則どおりにしないと……」機動の影響か、微かに頬を上気させ、困ったように微笑みを投げかける。……あああああ、抱きしめたい。行って抱きしめたい！「ど、どうしたのお姉ちゃん」……平常心平常心。

「そもそも、私達トーシロが元プロや現役相手にいい勝負しろって言うのが間違いなのよ」

「でも、みんなちゃんと働いてるんだよ。私達も学生なりにがんばらないと」

「だからあ、学生を徴用しようってのが気に入らないのよ」

と、我が妹ながら誇らしいを前に素晴らしく健やかな時間を過

しているソイツは来た。

『おいおい、オドレら。何が気に入らないって？』

視線をやると、右舷モニターを少年が埋め尽くしていた。「げえっ」「あ、火鏡さんだ」

通常のフロジストン防壁の光を全身にまとい、その上から支給された軽量の自警団員服を着こむ彼らに有って、ワックスで立てた地の金髪に、“根性”と東洋の“漢字”で書きなぐった額の布、黒いTシャツに赤い炎の模様そこに一言、“健康体”、彼のいでたちは大いに目立つ物だった。

『俺に任せてくれりゃあ、どんな敵もバツチし一発KOや。まあ今日はアンさんらのデバンは無いで。あの不気味イな体調さんモイツパツやでしかし』

『《奇跡の星》大バカ者、今日どんな芸を見せてくれるんだ？』

ああ……二班は今日も負けだな『おいおいおい、馬鹿が寝言言ってるぞ。起きてるのに』『もしお前が隊長に勝てたなら、

俺はお前に全財産進呈してもいい』

『テ、テメエら……。いいか、今日の俺は一味違う。なんたって秘密兵器が有るからな』

『お前自覚しろよ。遊んでるんじゃないんだぜ』

『マツタクだな実際』

『『そこは反論しろよ！』』

『ははは、所で火鏡。今日、二班の誇るエースアタッカーはどうしたのよ。学校にも来てないみたいだけど？』

『しらねえよ。いつも通り、こっそり例のあそこに通ってるんだろ？ 第一、エースは一才上だろ、お前が知らない事を俺なんか知れる訳ねえだろ。知能考えるバカ』

「……あんた、遠まわしに自分も馬鹿にしてるわよ。だから、あなたのお兄さんに、」

『兄さん……だと……？』

突如、視界の中アップで映る火鏡が、まるで致死性のある病気に

でもかかったように、震えだした。
つい先ほどまで血気盛んに吠えたてて居た褐色の顔が見る間に曇り、青ざめて行く。

『……兄貴の事には、触れないでくれ』

「そ、そう。大変ね」

視界をHUD……多目的ディスプレイだったか、に目を合わせ。画面にはこれから取るべきコースと、その先にある目的地、そこまでの時間が表示されている。

後、二十数秒。

「そう言えば、姉さん。さっき、」

「ん？」

二十秒切った。

「ああ。さっき、下を行ってたやつね。別に大したことないのよ。

あのおっさんよ、おっさん」

「ああ、あのお世話になった」

十五秒か。

「……でも、姉さん。もう一人の方をこっそり、」

「ああああああ。分かった。分かった、分かったわよ。話す、話すって」

……お、恐ろしい子、まさかあの一瞬で私の注意の対象に気づくなんて。いや、まさか愛、まさかこれは愛のなせる技なのね。常日頃私の動きを至近距離で見続けているあなただから出来る特技、ステキっ!!!

十秒有る。

仕方がない、とそう口を開きかけて、止まった。

弾幕が 無数の血の色に似た紅の雨が、突如まじかで爆裂したからだ。

『ぬあま、ちゆるあ、ちよろぎいい、』

「火、火鏡……お前……」

ふえ、と思わず口から出た情けない声を帳消しにして、さらに情けない……真つ赤に染まった火鏡の訳のわからない通信がコクピットに飛び込んだ。

『なんだ。コレ……ペイント弾……？』 『おいおいおい、まさか』
『つてか苦っ』

口々に混線する無線がおぼろげながらに事態を伝えてきた。……
というか、

「あの、奏姉ちゃん、あの、」

『ん、なんだ？ 今俺の通信装置に”YOU WERE DIED”
”つて”』

「……」

「今ねっ、すぐ後ろの方からねっ、照準のねっ、魔法がしようしや
しゃれて、」

『ああん、なんだ？ もしかして、今真上にいるのって、Aチーム
……つてことは』

機体の対魔術アラートが鳴り響く。

「……つまり沙耶、どういふことか試しに叫んでみてくれる？」

次の瞬間。

航空機動外装骨格のスピーカーが全開になり、

「私達のうしろが団長さん達に狙われてます〜!」
と叫んだ。

次の瞬間。

奇襲をかけていた伏兵達が一瞬手を止め、そろって声を上げた。

「それ何か意味がうううう!」

「くそう、沙耶ちゃんを後ろから不意打ちとは、しかもまだ準備が出来ていない内から熱いもんぶっかけやがって、なんて不ら……ゲフンゲフン、なんて卑怯な、ぶっ殺してやる!」

「隊長、でも冷静に考えると、我々はいごからこっさり狙われているであります」

「ゲエツ、奴らそんな趣味が……」

「いやいやいや、あんたらおかしから。手いつか俺たち既に殺られているんだが」

「はあ……終わった。緊急時の対応が全然ね。兎も角。この統制取れていないバカどもを何とかしないと」

「気を立て直さないと。頬をピシヤリと打って気を引き締める。……不意打ちとは言え部隊は半壊。実戦ならこんな甘い対応で済ませていい訳が無い。あくまでもまっとうに役割を果たさそうとするんならもつと考えて動かないと。」

赤いペイント弾は対人魔法。フロジストンを消費して撃ちこむ中でも随分と軽い種類の物……と言う事になっている。だから、この機体には効かない。……しかし、

『貴様ら。真面目にせんか。特に被弾したバカ共は、”死んだ”』

誰もが一瞬息をのんだ。呑まなけりやそいつはなんなんだ。

『正直に言つて、俺たちが居る理由も何も、お前たちには理解できんだろう。だが、どうかこの訓練、せめて今からは真面目にこの授業を受けろ、学校を出ようがどうだろうが、お前たちがこれから生きて行くために学ぶべきことは沢山ある』一息ついて、

『何せ、今我々は”ヤツら”と戦争をしているんだからな』

そんなこと言われなくても知っている。分かっている。悔しくて飲み込んだ言葉が胸の中で暴れまわり、呼吸を苦しくさせた。

すぐ後ろ、「お姉さん」言われて、気づくのは頬に触れる手のぬくもり。「ああ、うん。ありがとう。大丈夫、大丈夫だから」

知っている。本当に、一番つらいのは……。

脳裏を抜けるフラッシュバック。断片的なイメージはバラバラな物。燃える町、神戸、という名前。

「本当に大丈夫だから」

言った言葉は頼りになるように聞こえただろうか？ 崩壊す

る大地、消えて行く街の光、それに代わって空を埋め尽くす白色の稲妻の群。並んで、睥睨する黒い死神のイメージ、”羽持つ人々”、”ヤツら”たち。その奥から覗いた、温かな鳶色の陰……これは、何？

いけない。

首を振って悪い考えを振り切った。

『……今の戦闘で”死んだ”グループの皆さんは一度、離れて下さい。演習は続けますが、少し歴史の講義をしましょう。我々と、”ヤツら”の間に起きた幾つかの出来事を』

周囲、敵のグループが左右に分かれ、挟み込む構え。

人々の日常（後書き）

コメントが……力になります……

なるべく……なるべく早く次を……

次回はバトルバトルで押していきます

グフウ

歴史再考1（前書き）

色々書くつもりでしたが、
戦闘は結局少しに。

色々あって、今回少し中途半端に……（――；）

歴史再考 1

僕らは長い長い戦いを続けていた。

いつ止むともない紅蓮のゆらめきに赤々と照らされた黒雲。接触致死の雷撃を纏い、雷撃の精霊のように空を埋め尽くすシユヴァリ工《正騎士》の戦士団、空恐ろしくなるほどに青く凍てついた術砲撃が、目標の背後、狙わないはずだった非戦闘員達を薙ぎ払う混沌雑多な彼らの武器が空に向けて振りかざされ、ばら撒かれる光る玉が黒煙に混じって悲しげな小花火を散らした。大理石と石造りの町並みは、もはや彼ら自身の血と、肉によって黒く、赤く、塗りつぶされていた。ゴムに似た、と言うのか。もう顔中を黒く染める煤煙と一緒に慣れっこになってしまったにおい。僕は鼻をすすってなんとか立ち上がる。

名も知らぬ小さな町。攻略戦はそこから始まった。

当初、より強固な要塞を予想して、はじめられた攻略戦はしかし、そこが単なる彼らの町で有ると知り、崇高なる我らの誓いと闘いは混乱と汚濁の内に呑みこまれて消えて行った。

彼らの町の地面を踏みしめる。じゅりと音がして、妹から送られたブーツの底が彼らの石畳と、靴との間に何かを摩擦させた。

墨だ。

それが 羽のない人の形、不完全なる物、かれらの形をしていると知って 思いつきり吐いた。ソレは明らかに子供の“ぶんりよう”だった。彼、或いは彼女の物だろうか？ 散らされた光る粒が最早その勢いを失いつつある大火の後の残り火に照らされて、墨でできた“誰か”だった物を静かに彩っている。

屈み、一粒を拾う。

それはとても精緻な作りをしていた。家にある手作りの石のビーズに似ていなくもない。ただし家にあるコレはここまで小さく、作り込まれてはいない。

一度だけ“誰か”だった物を見て、これをポケットにそつと閉まった。……もう死んでここにはいない“誰か”なら、もうこれは必要ないよな、と。これを取ったことを怒って、夜寝るときに出てこないといいけど、とも考えていたけれど。

そもそも彼らは死んだらどこへ行くのか？ と、たわいのない思考に逃げ込もうとした僕にも、外界の音は耳に運び込まれてきた。

誰かが叫びながら彼らの武器を空に向かってばら撒いている。

誰かが苛立ちを町中そこらを物色しているのか、戸を壊し、中へと押し入る。

誰かが動かなくなつた同胞の肩を、そこから下はもう僕達の世界には存在しない、上半身より少し早く私達のいつか行く場所へと先に行つた。いつまでも揺らし続けている。

誰かが泣いている。知らない言葉、

息を吸い、むせた。

誰だ？

慌て、立ち上がり、そして思いつきり転んだ。鼻から血が垂れるのを感じながらも背の羽をバタつかせなんとか立ち上がり、そのままに加速して走つた。

そこはモスクだった。……いやジンだったか？ あるいはチャーチ、忘れたがとにかく彼らにとっての大切な場所。豪華な石造りの建物には彼らの何か大切な物が保管されているらしいとブリーフィングで聞いたような気がする。堅牢な石造りの建造物がそこにあつた。

音をたどつて進むと扉が有つた。下半分が調理に失敗したガルハン焼き（注釈・焼いたパイに似る故郷の料理）にて真っ黒に焼け焦げ、そこに彫り込まれていたと思われる装飾は得体のしれない生々しい起伏の凹凸に覆われ、さながらケロイドの様相を呈していた。

この分では彼らの宝という物も既に形を成しては、

！

音だ。

夢中で周囲のフロジストンを巻き上げ、風にし、それを背の羽で受けながら飛び上がった。

……次いで行われる動作は跳躍であった。自然に右の足を再度、空中に叩きつけるように振り、同時に、フロジストン結界を足羽から生成し、踏みつけることでソレは成った。

扉、その上端に降りる。

そこには沢山の彼らが居た。いや、正確には過去形においての“居た”だったけど。

「……惨い」

惨状はその一言に尽きた。一步、奥へ踏み出そうとして止めた。咄嗟に手で口を覆い、飛び上がる。中空、天井からつるされた飾りの上に飛び乗る。

すると事態は容易に把握できた。

結論から言うと彼らは火を焚いたらしい。それも一部の植物や生物の作り出す冷光、グリモア《魔道書》や真術を使つての光では無い、より原子的な方の火のことだ。彼らにとて、閉所で長く火を使い続ける事に対する真理の心得は無かつたのだろうか？ ……答えは恐らく否、だ。

息を吸い込んで飛び降りた、先、まだ温かい灰の山の中から無数の本状の物質が出てきた。彼らの経典だろうか？ を拾い上げ、はらはらとページをめくりながら考える。

彼らは怖かつたのだ。自分達によるべを進んで火にくべてしまうほどに。敵を恐れ、余りに恐れるあまり、彼らの潜む闇の中にまでその姿を顕現せしめてしまうほどに。

だから火を使った。火を使って、そして、
「……何故」

それが偽らざる心境の告白であった。

彼らは何故こんな自殺めいたことをせずには居られなかったのか？ 確かに我々は彼らにとつては異教徒かもしれないが、我々は少なくとも彼らの最低限の人権を守るくらいの度量が騎士団にはある

はずだ。

！

まただ。

薄く焼かれた本を無意識に腰のバッグに押し込み、こんどこそ足をその建物の奥に進めた。そこには一見何も無いように見えたが、微かな風の流れが存在しており、それがここからは見えない微かな空間を意識させた。

「……」

逡巡は少しの間僕の動きを止めた。

けれども結局得体のしれない衝動に突き動かされた僕はそつと、壁の継ぎ目に偽装されていた扉に手をかけた。

その先には、

……書いていた手帳がひょいと持ち上げられ、僕の視界から消失した。

視線を開けると、エスワイヤ《準騎士》全員に配られる面貌がそこにあった。

「何やってんだよ、我が親愛なる友、マルス」

よく見ると、その面貌からはよく見知った顔が覗いている。

微笑んで立ち上がると、全身が下敷きになっていた草花の欠片に覆われていた。

服を払うと、精霊や精霊虫に対する防虫防精効果のある香がパツと散って鼻に抜けた。払う手に合わせて、全身の鎧や礼服の隙間から間断なく葉の欠片がこぼれおちてくる。

「寝る場所を考えなかったな、マルス。自分についての汚れは自分で払えよ」

顔を上げると、見慣れた顔があった。黒混じりの鳶色。その髪と耳羽、瞳だけが微かに不吉を宿して赤い。その印象がニヤと親しげ

な表情に変わると、乱暴に身体をぶつけ肩を構える。

「うつかりだ。気づかなかったよ」

微笑みかけて、けれど内心ではこの香に感謝していた。取れるかもしれないと思ったからだ。体に染みついた煉獄、死のにおいが。

「やあ、我が親愛なる暇人、ネイガス、僕も丁度今暇していたところさ」

「それで日記書きかい？ おお嫌だ、物書きなんて根暗な趣味。我らが偉大なる祖先達よ、我が最愛の親友にして救いがたき根暗男に幸いを与えたまえ。後、私には美人な伴侶を与えたまえ」

「暇な奴。それを言う君が一番暇そうに見えるけどね」

「元々商業階級出身には交渉する相手も、売ったり買ったりする刺激もなけりゃ、随分と世の中は暇なものさ。ああ、さっさと町に帰りたい。連中だって、好き好んでこんな辺鄙なところに住んでいるんだ。連中だって連中なりに楽しく遣ってるんだろうに。ワザワザこんな物資も戦略的価値も無い所にまで足を運んで。まるでオレらはバカみたいじゃないか」

「そうかな？ ……そうかもね。僕達、のやっていることは、本当にバカな事かもしれないな」

嘆息し見回す。暇そうな連中が偶然見つけた島の淵の方に陣取って何やら騒いでいる。空中で模擬戦でもしているのだろうか。「何にも知らずにこんなところに集められて、それで戦わされて」

視線を更の上に持ち上げると、光を放つ玉が有る。太陽だ。ただし、空にたゆむ光輪を周囲に存在させた。

「お、今日は三重だ」

「……そうだね」

「見るよ。キヤハ子が双子と組んでなんかやってんぞ」

「……模擬戦じゃないかな、レオン君が傍に居るし。折角だしネイガス、君も参加してきたら？」

言って気づく。コイツ、本当に何にも考えてないな、と。奪われ

た日記は仕方ない。仕方が無いから日記を書くことは諦めよう。
代わりに……と彼は思う。代わりに僕は日記を書くのでなく、次の
ネタ、今温めているネタについて考えることにした。

フロジストンに満たされた世界において、電磁波や電波、広義の
意味においての光は、特別な意味を持つて存在する。

手を掲げ、念じる、すると手の中に光の球が幾つか生み出され、
絡まり会い、やがてその姿を変化させて光の円になり、やがて弾け、
ソレを握り込んだ。光の粒が弾け、微かな圧力を手に感じ、手を開
くの中には小さなコクヨウセキに似た石粒が握られている。

術。

先天的に我々“空の人”、つまり“我々”が、先天的に持つてい
たとされる技能。耳羽を整えて微かに念じるとビリとした触感が指
に抜けた。……ここから放たれた式が虚空にあるフロジストンを変
質させて、それぞれの個人の得意とする術を発動させる。
例えば質量的具現化、こんなふうに。

しかし結局のところ、我々にも完全な理解は望めないでいる。少な
くとも、フロジストンが無い世界という物がそもそも想像ができな
い。そもそも、我々は“彼ら”程、果たして世界に対して通じてい
るのだろうか？ 皆うすうす感じている。伝統と伝説、だけでは
世界は説明がつかないという事に。

手に生み出された石を指でもてあそんでいると、指に衝撃が
来た。

手の中に生じた紫電によって弾かれたのだ。

視線をやると、ピンと立てられた指先が有り、

「おいマルス。ネイガス。罰則を食らわされたくなければ今すぐこ
つちへ来い！」

「ゲエツ、サクラ班長様だ」

その指先にはビリツとはすまないレベルの電光が宿ってい
た、二人して直立不動、悲しいほどになれた動作だ。隊長騎仕様の
エスワイア鎧と槍 花に似た刻印の鎧と扁平で鋭角な二等辺三角

形のランケア《槍》　　サクラ班長、現在のエスワイア《準騎士・訓練生レベル》筆頭の少女。

「班長様では無い。今の私は。君達と同じ一兵卒に近い。無論、修業時代の名前で呼んでくれるなら、ありがたい物だがな」

稀有な黒という色に彩られた彼女は、そう言つて胸を張つた。黒い髪、黒い瞳、そして黒い背の羽に耳の付け根の羽足羽と計六枚の羽根までも濡れた光沢を放つ黒だ。ただ一つ、静かに引き結ばれた唇だけが透き通つた白の肌に仄かな桜色を咲かせていた。

「サクラあ筆頭う、どうせ今回は偵察任務で、どうせ少しばかり連中と何かがあつたとしても、何とでもなるんじゃないのかよ」

「そももいかん。言いたくはないが、お前達、実戦を前にして弛んでるぞ」

「じゃあ、何、雲超えに十時間かかつて、仮眠はたつたの三時間、それで偵察三時間、飯に一時間、時間の合間は陣地設営に働かされ、睡眠は途中たつたの四時間、自由時間たつたの三時間でぶつ続けだぞ、俺ら！　くそう、悔しかったら俺ら下っ端より働いて、スイマセンでした貴方様こそが我が隊一番の働き物ですと土下座して詫びやがれッ！」

「……ネイ、それは」
見ると、くりつとした一重の瞳が少し驚いて見せた後、

「私は雲超えに十時間、一番空気抵抗のかかる陣形の前方の至近で飛び続け、偵察では数機の敵の一つ目力カシ人形数機を出し抜いて進み、睡眠はたつたの一時間、仮眠なら食べながら行ったが自由時間はタダの一度もなかった。が、それがどうかしたか」

「スイマセンでした貴方様こそが我が隊一番の働き物ですッ！」
「うむうむ。分ければよろしい」

空中で土下座を行いながら落下した友をみて「……」無言の内に
出かかった言葉は飲み込んだ。

「……ところで筆頭、ああ、えっと、サクラ。所で何か話が有つたんじゃないのか？」

「ああ。その事なんだがな」

土下座中の友を置き去りに、サクラはなぜかやや満足げな顔を
して耳の付け根を……他の人より微かに薄く、小ぶりな耳の黒の羽を
指差した。

……ああ。

「“彼ら”の通信が？」

「流れてきている。向こうの方がいい、彼らの言葉が明瞭に聞き取
れるからな」

「そんなモノ聞いて何かになるのかよ。オレ連中の出す波長を解析
とか出来ないしょ」

「そんなことなら多少は私ができるし、例の双子ならより明瞭にで
きるだろう。確かマルスは彼らの言語を教わっていたはずだよな」

「えっと、うん。僕のロットドやグリモアの支援が使えれば、多分」

「じゃあきまりだな」

言って問答無用と背を向け、歩きだす。とその時、礼服の裾、長
く後ろに伸ばされた髪、今は折りたたまれている羽が順々に薄く甘
い香りを散らしながら翻った。

「……」

「なんだマルス。見とれてくれているのか？」

「いや、違うって。それよりも、どうしてそんなに相手方が……
やっぱり君も気になるのかい？ “彼ら”のその……、思考形態と
いうかなんというか」

白状すると、少々の期待を込めて行つた。

「ああ」

彼女は頷き、向き直り、言った。

「敵を知り己を知れば、だ。昔人間のラジオで言っていたセリフだ
な。我々は“連中”の考えを知らねばならん。それが我々の勝利へ
ともつながるんだしな、それがどうした？」

「……いや、なんでもない。レオン達は今模擬戦かな？ 呼び戻さ
ないと」言って背を向けた時だ。

「だがな」

と言葉が割り込んできた。

風が吹いた。淡い香をどこかへと運び去ってしまう。

「個人的にはな」と前置きして、「少しだけ気になるんだよ」と続けた。

少し眉をしかめるようにして一瞬考え込むようにして、

「おかしいだらう」

と言つて微笑んだ。

香はもうどこかへと完全に消え去ってしまった。僕はそうだね、とだけ答えて、その場を後にしなくてはならないだらう。空中でじゃれ合っている双子や少し離れた場所でたたずんでいるレオンを捕まえなければならなかったからだ・

けれども、きつとすぐに僕は後悔する事になる。

今この瞬間、何が起きていたのかということについて。

そんな予感がしていた。

見上げると雲が有る。だが真下にも雲が有る。上には空が有るが下には果たしてやはりただ無限に続く空が有った。雲のカーペットから除く下方にはやはり無限に光の層が続いて行く。心地よい羽ばたきのリズムに身を浸し、見回した空はやはり平穩というべた塗りの青に覆われていた。

電離層。本来の大気圏にはソレが存在する。地上で行われる無線は放った電波が上空のそこに反射されることでより遠方へとその電波を届かせる。

この世界においても、その理は守られている。

……一応は、だが。耳朵を甘く、くすぐる地上のラジオ代わりの無線機から流れるテノールを耳に思う。

上下をその電離層に囲まれた空間において、多少の劣化を孕みつ

つも電波は無限に反射を続け、今有るよりはるかかなたの空間の中を満たしていくはずだ。しかしソレが無い。電波波は弱体化し、時に不可思議な消滅を行う。

ソレだけでは無い。

何故か物理的な意味においての果てという物は無いこの世界には、何故か地上からの電波が訪れることがしばしば見受けられる。説としては無数にあるが、未だに一体いかな構造か、いつ頃から地球の空に存在していたのか、太陽の光は何故この空間に入り込みうるのか？ 疑問は多く、まだ解明されていない謎も多いがタダ一つ言えることは、

「世界はつながっている。しかし不完全だ、か」

「お、文学しているね。ちょっと前の流行作家だっけか」

“果物屋”無遠慮なだみ声に眉を動かしつつ、音の不安定な無線機を

耳を傾けていた、地上から漏れ聞こえる洋楽が途切れ、取って代わったのは耳障りなノイズと誰かの語りかける声だった。

『……………我……………歴史は……………』

起き上がり、直すとその音は明瞭に聞こえてきた。

『かくして、大地を破壊した先の愚かなる大戦から十年。大地の汚染は進み、決して人々が住めない領域は日に日に増えて行った』

「歴史の授業でもやってんのか、コヤツ。儂この手の授業大っきらいでな。昔授業サボろうと後ろのドアから抜け出ようとしたら、剣山置いてあったのだ。それである教師、教室中血まみれに……………思い出しただけでも腹立つなあ」

「それ教師が嫌いなだけだろう貴君。小生は、いや私は意外と暗記とか好きでな。確かそういう授業でこ奴……………」

耳を澄まし、彼の声音に集中する。

『かろうつ時で戦争を止めた賢明なる我々の子孫は、新たに発見されていた時空、かつての我々の空に常に常により、常に亜音速の速さで地球を回り続ける異空間への調査、そして……………』

「思い出したぞ。確かこ奴、小生のクラスの副担任、確か歴史と軍事、後強制加入の自警団でも仮想敵をよく遣ると言う」

「へえ。しかし、軍事と歴史、もしかして元軍人さんとかかよ。…相当偏った授業とかしてそうだな……」

「まあ確かにな。しかしこ奴、どちらかと言うと右翼という奴だが、今はどうせ戦時下。コレが普通らしいぞ。小生どちらかと言えばアナキーだしな。見ている、すぐに過激になって行くぞ」

「何かしようと思わんのか？ 先生、その授業どうかと思いますって、……ワシそう言う事言った後、廊下に立たされたが」

へえ、と気のない返事を耳にしながら彼は目をすがめた。

「断じて断る、私には関係の無い話だ」
思い出すのは一言。

貴様が一番にはなれない。ましてや今のままでは何者かになる等と……、よく言えた物ですね。

は、と息を吐き、脈動する青の背中にもたれかかった。灰色の過去、知らずかみ合わせた歯の内には、言葉にならない何か講義の言葉が渦巻いていたが……、それはただ平坦に言葉を吐きだす無線機には関係の無い話だった。

ソレは淡々と告げる。

『そして、移民計画が発令されたのです』

歴史再考1（後書き）

ええ、もう少し色々と考えてから小説を出そうと思います。

幾つかの点で気になることが有りますので……

後、個人的に2話は美味くかけなかったので、

またおりをみて書き換えに行くかもしれません。

歴史再考2（前書き）

かなり間を詰めた四話目投稿です。

どのように話を進めて行くかという構成の面で相も変わらず不安があります……、

というか、幾つかのプロットを関連させながら同時進行するというのはやっぱり難しいです。

歴史再考2

「空での生活は快適とは言い難かった。生まれてきた子供の四割が生後数カ月で、環境に適応できず死にゆく世界、あの時は地獄だった」

噛み含めるようにして吐き出される言葉は、籠ったエンジン音に包まれた空間でも声になつて機内を反響した。

「それでも我々は頑張った。歯を食いしばり、足に力を込めて精一杯、この限られた大地に鋏を打ちこんだ。無論その中で才覚を発揮し、皆の為に尽力してくれた人もいる」

すぐ背後、妹が息をのむ気配を感じた。

「皆も知つてのことと思うが、私達の仲間である奏、沙耶・エイワス君達の親御さんがソレにあたります。彼はここへと来る前に国連の平和大使を務めていた経験を生かして、我々と“彼ら”の間の調停を、そして相互の理解を目指して奮闘した」

「奏お姉ちゃんッ！ お父さんの事だよッ！ ほら、お話ッ！」
弾んだ声が狭い室内を反響して耳に抜けた。

「……別にそんなに叫ばなくたって分かつてるわよ、沙耶。私も嬉しいわ。ただね、」

身内が褒められているというのは気恥ずかしくも有り、でも嬉しいものだ。すぐ後ろ、笑顔の感触を耳朶に感じ取りながらそう感じる。微妙に持ちあがろうとする頬をなんとか抑え込みながらしかし、叫んだ。

「つて、そう言うことは、戦闘が終わつてからいつてね！」

前後左右、加えて上下からの誘導弾扱いのミサイル攻撃を目の前に認めて叫んだ。

右眼前に転倒する赤文字、自動の緊急回避機動が作動し、機体は

高速で回転状態へ。モニターに映る太陽が四度視界を横切った辺りで、回数を数えることは諦めた。肺から無理やり空気が押し出されるような感覚に歯を食いしばって耐えつつ見ると、腕部フロジストン・シールドの展開とスラスタの多様が、機体をミサイルの囲みから救い出し、第一撃を潜り抜けていた。

しかし安心するのもつかの間、続いて撃たれていた攻撃が、狙い澄ましたかのように回避の先に張られている。

「こらぁー変態工口鬼畜教官！ 少しは手加減しろー！」

『いけませんねえ、変態と工口は認められません。それに手加減しては訓練の意味が無いじゃありませんか。貴方達には自覚が足りません。きつちり聞いて、勉強なさい』

次いで放たれるガトリングの火線、連続魔道弾扱い、再度転倒する赤文字に、数秒後の緊急回避を意識したその瞬間、

ッ！

言語を介さない領域で妹から伝わった意識が“危険”という一文字を私に伝える。回避の先、二騎の待ち伏せ。

上方から声、

『しつかりしろエイワス姉妹、今から攻める。きつちり対応して見せる！』

「クツ……！」

慌て、握り込んだグリップが、機体に操作の意思を伝え、緊急回避が停止させられる。

スラスタのペダルを踏み込んで、機体をガトリングの火線へと突っ込ませた。降り注ぐ黄色の雨、“通常装甲は貫通”の証。しかし、

「ナイスガード、沙耶！」

『腕部シールドでのチャージかッ！』

ルール上、シールドでならガード可能となっている。両腕部に使われていたシールドが展開。片方の手がガトリングを退け、もう片方の腕が 重工専用にも使われる巨大な三本指の腕部が敵チームの一人を捉えていた。接触回線が開く。

「見事だ。思い切ったいい操縦だった。矢張り姉妹の“認識共有”の術式は強力だな」

「まあね、見てるガッツデム教官野郎っ、姉妹の絆に恐れ入ったか！」

「やったね、お姉ちゃん！」

「構いませんが……次、来てますよ」

上方と右舷から迫る二騎の重装甲型。

「げえっ!?!」

機体の運動エネルギーは浮遊中に関して言えば常に、ゼロである。そこに対して、急速な加速や方向転換が必要とされる場合にのみ、推進剤とエネルギーと一瞬のタイムラグをを消費する事で高速の機動を行うのだ。

距離は至近、送られたイメージの内、相手は確かに射撃体勢に入っており、

……まずい、アクセル、間に合わないッ、なら緊急降下、ダメ、上のヤツに狙われてるッ!?!

焦りが行動を停止させ、棒立ちのまま貴重な一瞬が過ぎていく。

次の瞬間、予想もしなかった声 came。

「まあてやごるあああああああああ！」

叫びと共に、ソイツは来た。

「火鏡ッ!?!」

「おうよ、随伴兵舐めんなよ！俺様参上やでえええ！」

言って、いつの間にか中空を蹴って移動する、黒いTシャツ姿が上方から来ている重装甲型に“爆発上等”と書かれた無数の符を巻きつけた右腕を振り抜く。ついで連鎖爆発、光の粒と閃光と煙幕の三色が空間を飲み込む。爆炎をかるうじで抜ける重装甲には全身に“準・行動不能”の印、緑の光が全身に散っている。

続く一機が追撃をかけようとしたが、

「不意撃ち上等！さっきはよくもやってくれたな貴様、処刑だ処

刑!』 『ははは、良いけどまだ口の中にペイント弾の味が……』 『おいこら、さつきおふざけは無しだって……まあ存在自体ふざけるやつは別としてだが』

『んだとこるあ、褒めても何も出ねえぞオイ!』

いや、褒めてねえぞ、と、いつの間にか全方位から声があったと同時に。重装甲型の随伴兵の面々が抜剣、或いは抜刀。何時の間にか至近に攻め込んでいた二騎を含め、都合四騎の装甲の継ぎ目に、各々の獲物をねじこんでいた。

ほう、と初めて講義の声が止まる。

『悪い、奏、沙耶ちゃん。ワテら遅れてしもつてえらいスマへんな。今からバッチシ活躍しちやるけえ少しまっついてな』

気楽な声に、安堵と共に機体を高速で機動させるべくアクセルを踏み込んで機体を高速でその場から離れさせる。

「チイ、兎も角無事な猟兵は別同隊として敵をこつちに追い込んで近衛、じゃなかった“地獄の死傷者復活コース”から随伴兵は何人戻ってこられたわけ?」

『我々は駄目であります』しよげた声が返ってきた。『敗因を聞かれて火鏡のせいって答えたら……』 『オイコラテメエら覚えてろい!』 『Bチームは無事。機体前面組待機組以外は壊滅という事かな』 『猟兵隊は2チームとも無事だ。少し離れていたから咄嗟に回避軌道を取れた。反省点は無し、補習も当然なし、だ』 『今回は俺達で追いこもつ』

航空機動猟兵。軽武装、高火力、高機動力、高侵攻距離の精鋭。反面特殊な装備や防御力を削いだグループの事、と便宜的に付けていたはず……だからえつと……、

混乱しているとすぐ背後から声がした。

「敵は猟兵隊中心のグループです。反則の不意打ちをしてきたことから、まだ何か隠し持っている可能性も有りますが、基本的に猟兵隊を中心にした機動戦になるでしょう」

一息ついて、

「なので此方は逆に、敵が戦力を分散した所を、外装骨格の防御力と火力、直進速度を利用して、戦力が分断された所を集中的に狙って各個撃破を狙っていきましょう。パンチ力の有る随伴兵隊が壊滅というのが痛いですが……これでよろしいでしょうか？ 奏姉さま」

「バッチシよ！ 皆！」

声をかけると、全員が此方を向いてくれた。

私はあくまでも胸を張って、皆に向かって語りかける。

「作戦は以上よ。後は臨機応変。どっちにしる向こうが上手なのは分かっているんだから、こっちは全力でぶつかるだけ。せめて、とか言ってみたいけど今は抜き。みんな、」

少しためて言う。

「みんなのお尻は各自、責任を持って守るように」

皆の顔に笑いが生まれた。輪唱。皆で銃身を手でたたき、肩をゆすつりあつて。

いい兆候だ。

「これで精々勝率十パーセントくらいかな。でも、さあ、卑怯なるAチームの連中に、目に物見せてやるわよ！」

「了解」「了解い」「了解！」叫んでまず航空機動獵兵達が二手に分かれて行く。背の浮遊装置とは別に、各部のたつた二十秒しか使えないスラスタを駆使し、フロジストン結界を瞬間的に足場に展開そしてソレを蹴る事によって、文字通り宙を駆ける彼らの機動力は頼りになる。

随伴兵達は重装甲に手に仕込み拳銃、ナイフ、ブレード、ランス・ガン、ヘヴィランス、マシンガン等各々の武器を確認し、機体の装甲部分の手すりにつかまっていく。

正直に、と彼女は思う。彼らは頼りになる。無論同じく普段敵役を務めている教官の方も。だ。

「所で、お姉ちゃん」

「何よ？」

「せめて、ってやっぱり……」

「そつよ」

思わず、不満と言う言葉が言葉になって漏れ出た。

「あのサボリのエース、あのトップガンさえサボってなきや三十パーセント位のイイ勝負が出来ただけどね」

言つて、空を見上げる。

暗雲。なんだか無性に嫌な事が起きそうな天気だ。……折角盛り上がった気分を、と心の中で思いつつ、

「じゃあない。発進！」

グリップを握り込み、機体を前へと発進させる。

『いいことも有った。我々が初めて体験した”彼ら”との出会い。初めて経験する”彼ら”、我々と事なつた有り様を示す生命との出

会い。ソレは我々に光明をもたらす出会いへとなるはずだった。…

…はずだったのだ』

「はずだった」

誰かが唐突に言つた。

何故かうすら寒くなる響きに、背筋の寒くなる思いを味わいながら目線を挙げた。

その先には黒く長い髪を携えた彼女が居た。ランケアの穂先を地面に打ち付け、一人顔を伏せて、ただ地面を食い入るように見つめている。

「……なあ、サクラ……？」

口が動いた。

「人間め」

そう動いて見えた。

『あろうことか彼らは、City Kobeに対して先制攻撃を始めとし、City U.S.A・Calif という中立地点

付近への侵犯行為。他にも多数の市民を虐殺し、我々に宣戦布告を
しました、コレは許されざる事です』

背後、ネイがポツリと漏らす、

「まあ確かに、K o - b e の時は参加した騎士団の責任が問われた
けど……、」

一氣にまくしたてるようにソプラノの美声が吠えかけた。

「なによコイツら！ 先制攻撃い！？ 冗談じゃないわ！ あいつ
ら、自分達がなにをやったのかを棚に上げて、あんな連中！ 死ん
だ方が、マシよ！ キャハハ、全員死んでいればいいのよ！」

喧々譁々の議論が交わされ、騒がしい声が上がったけど、そんな
物は全て右耳から抜けて左みみから抜けて行ったように感じた。

代わりに、心の比重を占めていたのは別の出来ごと。

「人間め、」

「なあ、サクラ……、大丈夫か？」

ド、と地面にランケアが撃ち込まれた。

『それらから身を守るためには、積極的自衛とて我々は躊躇しては
居られないでしょう。だから、』

「人間め、」

ド、と地面にランケアが撃ち込まれた。

「そら、始まったぞ」

言って、冷笑した。

冷笑の気配が伝わったのか背中が、けたたましく一啼きした。

『諸君、今我々はこうした経緯で戦争を行っています』

ふと感じたのは暴力のかおり。

「？」

『彼らは残忍な種族です。自分たちの行いを顧みようもしない民族性と、この空において脅威とも言える触媒や外付けの回路無しで、彼らの言葉である真術を扱う異能を有しています』

なぜか、きいた瞬間に感じた違和感。なにかを間違えたままという感覚のままに、訓練は続きます。

『クソツ、逃げられた』 『回せ回せ回せ！ 右舷グループもっと追い込め！』 『おら、さっさと死に晒せ』

すえた、埃の香。何かにせき立てるように周囲を見回すと、敵の攻撃に対して何人かの仲間の皆さんが、歯を剥いて、何かどうしようもない物を叩きつけるようにして大きな機関銃を振り回しています。

不安になり、目をつぶり、心の中の声に耳を澄ましますと、二人をつなぐ“認識共有”に雑音が入り込んでいます。苛立ちというよりは悲壮で、憤怒というにはむなしさが伴いすぎる。絶望……と思うと激しいまでの欲求が渦巻いてる。これは……、

「沙耶……」

「奏……あんたも感じてるのね。そんでなんとなく……おんなじように思ってる」

瞼の奥に浮かぶのは、鶯色の優しい光。災厄の夜にあって優しくかつた何か。

左右に大きく広がった羽、同い年位の少年。燃え盛る第二神戸市の街並みを駆けた記憶の渦。

私達は……と、思っていた。けれどここに居る何人かも覚えてる。あの時、あの場所で起きた何かを。

「ああああ、何でこんなにイライライライラしなきゃいけないのよ！ むかむかするわ！」

「嫌になるね、全く」

言ってその影は言ってラジオを切った。

その影は真つすぐと歩いて行こうとした。

しかし、別の何かを見つけて、立ち止った。

それは二つの物。一つは木造の空挺。

もう一つは光の粒を引く大鳥。

影は唇をゆがめて空を見る。

「へえ、君が。驚きだ」

頭が痛む、声がかすれる。激しいGに振り回される機内。声にならない嗚咽が漏れ出る。

「サクラ？」

「……一人にしてくれ」

話しかけた瞬間、寒い何かが背筋を抜けて行った。

ランケアの内に貯蔵されたフロジストンが漏れ出、黒い二等辺三角を彩る。

ボクは彼女の事をしつかりと見ていた。

震えるほど強くランケアの柄を握りしめた両手は、ギリと音を立てて握り込まれ。張り詰めた気配はさつきとすら言える領域であったのに、一人歩き去る姿は一陣の風にすらその骨子を叩き折られそうだ。

止めなければ。

具体的な思考を置き去りにした直感が先に向け、僕に右手を伸ばさせた。気にするなと言おうとしたのか、笑い飛ばせと言いたかったのか。とにかく真つすぐ伸ばされた右腕は彼女の肩にかかった。

彼女が振り返る。

激昂し、今にも崩壊しそうな危うさに瞳。底抜けの” なにか触れてはならないモノ”

得体のしれない奇行。普段なら消して見せない感情的な姿。

何かとの邂逅自体は一瞬だった。

みじめな僕は手を伸ばした手を具体的にどうしたいのかさえ分からぬまま宙をさまよい、

彼女はそのまま何処かへ行った。

そして、僕が彼女とまっとうに話すのはこれから数時間後の事となり、更に。

この事が後の大事件につながることを僕はまだ知らない。

苛立ちの感覚と共に、無線機のスイッチをひねった。するとさっきまでの声は嘘のように消え、代わって陽気なロックの音流れ出した。

切ろうかと思っただが……、陰気なのよりはマシとそう思い結局はそのままにした。

その存在にとって、此度の飛行は退屈な物であった。

そもそもその所今背中の上に居る生き物に不覚をもらったのがそもその原因だった。不可解な白光が世界を満たして……、

気づいたらもうこの生き物を食い殺すという事が考えられなくなっていた。食おうとくちばしを開いた瞬間に、確かに自分では無い自分の目の前に居る何かの持つ恐怖を感じ、それが自分の内にも同じく恐怖となって抜けたからだ。

目の前の存在は「よしよし」とか「キクン、なかなか物分かりが

いいな」等「ヒカガミのバカにもミナラわせたい」と言つて一人うんうんうなずいていた。

何故かは分からないが同じく愉快的な気持ちになり、しようがなくその意思を伝えて、とりあえずそ奴を背中に乗せることになった。

その後暫く空を飛んで、ノロノロ宙を舞うコイツの親戚仲間か兄弟達かの住む巢の集まっている部分を抜けて、その間途中で出会つたコイツと同種族であることは最低分かる奴が現れて話をしていた。途中で何十匹、何百匹のとべない連中があくせく空で働いている連中をみて、すぐ上のコイツが少し愉快に思っているのを感じたが、何が面白いのかと周囲を見回したが、矢張り少し遠くの空でじゃれている連中をみて少し愉快さを感じていたようだ。

哀れな事にこいつらには余程娯楽という物が不足しているらしい。まあ、些細な事にでも楽しみを見つけ出せるならそれは彼らにとつては良い事なのだろう。

彼らは楽しくも無い会話に時間をかけ、退屈を感じさせたが、ソレはソレとしてコヤツ達の生態がわかつただけでも良かったと思う事にしよう。

そう思っていると、なにやら小島が見えてきた。それは不思議な膜で覆われていた。その膜は見慣れない術で組まれてはいたが、コヤツ達以外にも術を使う奴らがいたと言う事を思い出して、ソイツ達もそのような術を使うのだし、コヤツ達も同じような術を使ったとしてもおかしいことではないか、と納得して観察を続けた。

不自然に平らな地面があちこちに存在し、幾つも“実”が成る植物があちこちらに点在し、幅を利かせていた。何やら見たことのない生き物が駆け回り、術を使って環境を整えている。ということ。ここはコヤツの巢なのか？ では何故ここに降りる？ ということはこここの巢を奪う気なのか。

そうか、ならば得意分野だ。
くちばしに生えた犬歯を鳴らして戦意を伝える。

「ヨセ。ここはシヨウセイの家だ」

静止の意思が走って、動きを止めた。

仕方ない。奇妙な縁が在った物だが、とりあえず飛び降りた。顔の横の羽を震わせて、周囲を探る。すると幾らかの意識が答えた。

四足の生き物が迫ってきて、少し吠えかかったが、背中に居たコイツが出て行くと少し臭いを嗅いで、顔を寄せて、そして舐めまわした。

安堵。まだ幼いころ、巣の中で感じていた物だ。なんとなく理解する。ここはコイツにとつての巣なのだ、と。

わらわらと寄ってくる緑色の奴らの臭いをかいでみると、苔に似た香が鼻を抜けた。まあソレはソレとして、きつといい輩だろう。

ここに居ない意識の気配がある。その内、二つの気配からは何か不穏な物を感じる。

グエと吠えるとヤツが反応した。

どこからか現れた丸いコヤツの同族が何かをつぶやくと、安堵の気配が少し減じたが、些細な問題だ。鎌首を挙げて、周囲を伺う。

羽毛が逆立ち、空気がピリと震えた気がした。

突然、少なくともそう思える唐突さで持つて黒い影が現れた。

「やあこんにちはサナテスクン。ヒサしぶりだね」と。

清浄、平穏。

しかし、彼らがその箱庭を見渡した時。

黒い蜃気楼、幽鬼にも似た何かがその清浄を犯していた。

歴史再考2（後書き）

拙文です。しかも集中力のある無いで作品のクオリティに残念な違いが……。

少し書き直しました。

展開開始（前書き）

思うに、まだ死んでませんよ作者は。ええ。

……死んでないだけです。

展開開始

「やあこんにちはサナテスク君。久しぶりだね」

「立花」

箱庭に降り立った時彼が一番初めに見たのはソイツだった。

その家は、中空にあった。町を構成する巨岩の島と連結された無数の孤島群。そこから更に外れた位置に注意深く隠されていた。上空から見た風景から言うと、まず住居と、整理されたイギリス風の庭園、その流れを無視して建築された和風の土蔵と、整然と整備された小さい畑とそこを綺麗に保つための設備や庭師、ゴーレム達の住居でもある納屋。原生の植物を利用して造られた小さなため池と大理石で出来たテラス。そして、長年の島自体の放浪の末に手に入れたお仲間の孤島群数個。コレは原生の植物の蔦と補強の為のケーブルによってつながれ、それぞれ異なった種類の植物の繁茂する天然の庭園と化していた。

平穩。

ただし妄執的な程の。果物屋はそう心の中で付け加えていた。

……自立駆動、半永久的に存在しうる防壁。管理に自分という要素を極力排しているという点からして、自分自身による管理でさえ十全ではないということか。

”果物屋”は密かにそう判断を下している。

清淨、平穩。

しかし、彼らがその箱庭に足を踏み入れた時、

黒い蜃気楼、幽鬼にも似た何かがその清淨を犯していた。

「サナテスク？」

しつかり地面を踏んで黒い影に相對する。背は微かに低い。サナテスクの背に隠れるようにしながらその陰が一度微かに浮いた。

襟首をつかみ、持ち挙げたのだ。

「失せる。この島にお前の居場所は無い」

「……いやだなあ、ボクは少し尋ねただけじゃないですか。そこま
でかつかないでくださいよ。そんな事言わなくてもすぐにでも出
て行きますよ。ただ……ねえ、ココにはあの方がいますし。ねえ」
一息ついた。

ゆるやかに微笑みながら、ソイツは言った。思わず踏み出し、胸
倉をつかみ、ねじり上げ。黒い葬儀人にも見えるスーツに小ぶり
で華奢な身体を包んでいる。細く、伶俐とも言える。細く鋭い視線、
三日月の笑みを浮かべる唇、白面の”薄い”顔立ち。一つ一つはま
だ見れたパーツで有り”整った”と言えるのに、葬儀人という印象
が会う人に、何かたちの悪い悪霊のような印象を与えている。

「止めんか、サナテスク。そ奴は、」「知ってるさ」
遮り、言った。

「何故ここにいる？ 立花」

プレッシャーに肌が泡立ち、総毛立つ、と言うのか。痺れを伴っ
た奇妙な沈黙が生じた。

ファミリアにしたアツカニヤ鳥が鬪争の気配に感づいたか、グエ
グエと鳴き、叫ぶ音が遙か遠くに聞こえる。「お、おい……」緊張
に気が張った”果物屋”が口を挟む。その動作を意に介さず、三日
月の笑みを一層深くしながら”立花”はサナテスクに語る。

「ささいな問題ですよ。思うに、あなたこそ、自分の仕事をもう少
しきつちりとするべきです」中性的でとらえどころのない 決し
て目の前の人間がしゃべっているとは思えない幽鬼の囁き。「ほら、

「
言って立花は、「たるんですよ」超至近、いつの間にか腰に出

現していた刀が左腰から、右逆手により抜き撃たれようとしている。鞘のある左腰から右上へと走る剣戟、そう認識した時には身体は既に薄く沈み込んでいる。「誰が、」最適落下曲線という物が有る。物の持つ落下エネルギーを最も効率よく運動エネルギーへと変換できる軌道だ。「たるんでるって？」一瞬膝の力を抜いて落下、そのまま右の足を微かに残し緩やかな曲線をイメージし、斜めへ左へ一步、踏み込む。同時に上体を斜めに倒し加速に活かしたため。耳を擦過して上に抜ける剣風。「……ッ！」「チッ」

放たれた斬撃は虚空を薙ぎ、ただ触れるだけで中空に在った幾枚かの柔らかな草の葉を縦に立ち割っていたが、死線に身を浸す彼らには関係のない事だった。

踏み込んだ左足を極力相手のすぐ右脇に置き、そのまま左足で跳躍。強引に左にねじった身体から生み出すのは、左足側面による変則回し蹴り。

対し、居合を打ち抜いた後の身体は開き、二発目を放てないでいる。つまり、

「当たれッ……！」

必中にして必殺の奇襲が形を成した。

伸びきった左足が相手の顔面を捉える軌道に嵌まる。

しかし、

「ボクにそんなのが効くと思っていたのかい」

左足を受け、止める物が有る。相手の左手、鞘だ。

一転不利が生まれた。

体勢を崩しながらの奇襲は防がれ、バランスを崩した着地、開き直ったの転倒、或いは回避、どの手を打ってもこのままでの着地はそのまま隙になる。正しい着地を取れば蹴り、踏みつけ、切り下ろし、突き、それら一切の致命の一撃に無防備になるからだ。通常なら。

彼は足を身体に引きつけ、回転に巻き込む。回転する身体が速力を増し、体勢を立て直す。身体は中空にあり、身動きはれなかった

が、

「その減らず口も、当たれば嫌でも閉じずにはいられまい！」

震脚、その言葉が表す通り、回転する身体を左足を地面に再度叩き込むことで強引に停止。回転が停止し、十全の意識の元真つすぐと相手に正対する身体。

これで振り出し……！ という思考。という計算はしかし、対し眼前には、鞘を捨て、振りあがった刀に左を添えての全速力が用意されつつある姿に打ち碎かれた。

大上段。その構えは、放たれれば最速。

変則居合程の狡知、或いは巧緻は存在しないが、人体の構造上最大の威力と早さを得られる物。……経験上撃たせれば”即死”。

絡み合う視線。

交錯する敵意と悪意。

脅威。その認識は枷となり、身体を後ろへと推し進めようとする物だが、愉悦、憎悪、劣等、乾き、言葉では形容しきれぬほどの有象無象が形を変え絡まり会い、現在を作り出す。その認識が結果として身体を前に出していた。

「……ッ！」

「……ッ！」

終わる。

何が、という主語を欠いたまま浮かんだその感覚が身を浸し、やがて。

その瞬間が訪れた。

「あああああああ」

と、吐き出す声が浮嶋のドックから放たれていた。やや日の陰り

はじめた空を震わせるその声は、浮嶋の”自警団”と書かれた鋼の扉の隙間を抜けて、壁と天井を地面を埋めつくす鉄の重機を抜けて、うなだれて座る白と青を主体にした装甲服の一団を抜けて、分解されたつつある強化カーボンのフレームと装甲を抜けて、航空機動外装骨格のコックピットのハッチの中、一人の少女の喉の奥から、
「やってられつかあああああつ！」
と続ける形で叫ばれていた。

「ああああああ。もう駄目ね、もう今日と言う今日はあのサボリのエースを引つ張ってくるべきだったわっ」

追いつく声が車座の集団から上がる。

「今日は負けたなー」「ははは、あんにやろうリーダーを囷にしての方位せん滅とはな」「つかあのサボリ。あのサボリこそ一度囷んでタコにすべきじゃないのか」

「まったくね、一度全員で囷んでタコにしましょつ。あんにやろう家の妹に色目使ってやがんだもんあつたま来ちゃうわ！」

握り拳で熱弁する姿に車座の一同が、そうだそうだ、や、ぶつ殺せ！ お前ならできる！ 俺ならできないが！ やんやんやんと無責任な煽りが入って盛り上がっていく。

最後にスポーツ刈り、健康的な体躯、航空機動猟兵隊のリーダーが言った。「雪辱は次か。おいエイワス姉妹、今日街で反省会兼ねて飲みに行くんだが来ないか？」

「ああ、ゴメン。私仕事あるから」

「そうか、すまないな。いつもの店に居るから、気になったらいつでも来てくれ」

「あら、ありがとうね」

コックピットからはい出して、顔を覆う簡易のヘルメットを脱ぎ去り頭を搔いて言った。微かに吹き始めた涼風が、身体にフィットしたスーツ越しに身体の熱を冷まし、空を流れた薄金の長髪をばらと散らして行くのを感じた。心地よい静寂が身を浸していく。

一息吐くと、身体の内にくすぶっていた熱狂の残滓、その最後の残りかすが、吐き出されて中に霧散して言った。

「奏お姉ちゃん、伯父さんの言うことも有るし、これからお仕事だけど今日はもう止めておく？」

振り返ると奏が居た。耳を隠す程度に切りそろえられたおそろいの薄金の髪がおでこに張り付いている。まん丸い緑の瞳が少しだけ困ったように目に少しかかる程の前髪的位置をちびちびとつまんでは直し、を繰り返していた。

「おおぅ……ッ！」

繊細な造形のビスクドールが熱を持って上気したらこのような印象を持つだろうか。正に至高。その動作の端々から覗く美しさ可愛らしさ可憐さはそのままに、無機質な造形の美が上気し、薄く濡れた頬が赤く染められた事で同時に生き物としての生々しいエロスと美しさを持ち、しかもソレがきわどいバランスで同居しているのだ。それが美しいと思ったら美しくない訳が無い。何故なら沙耶は人類として稀有な抱きしめたいくらいのかわいさと内面の純粹培養がれ無き淡雪のごとき繊細さを同居せしめる天地無双のまごう事無き美少女なのだ。

しかも彼女はリアルでは中々稀有なる多数の属性の使い手。すなわち”妹”と”献身性”と”カワイイ”と”抱き心地サイコー！”と”カワイイ”。

「……お姉ちゃん……？」

すなわち私の妹であるという美しいポジションを得るが故常に頭

を下げられる優越感、嬉しい恥ずかし美しい妹の献身。これらは過去云千年の人類史の中においても簡単に思う浮かべられこそすれ、決して単純に手にする事の出来ぬ幾つかの要素を持つ存在。それすなわち”妹献身系美少女”私はこれを長いので”妹献美”と呼んでいる。”いもけんぴ”と呼んでもいい。

しかしこれすなわちコレ至高の美少女なり。ひとたびコレを野に放てば、天下四方にこの”妹献美”力は四散し、大国強豪数多のライバル共を大地にひれ伏せさせ、天を割り雲を裂き、ついには世界平らげ、恒久的妹平和世界を創生さするであろう。しかし私は沙耶を衆目にさらすのは辛いので未だ世に太平はなっていない。

「……ああ、そうそう”妹献美”ね”いもけんぴ”」

「あ、えつと何を？」

「ああ、えつと。世界平和。そう、世界平和について考えてたのよ。世界平和」

「えつと……、うん。たまにお姉ちゃんの言ってることはよくわからないけど、私、お姉ちゃんのそういうところも含めて好きだよ。だから、何か困ったことがあったら遠慮しないで言ってね」

「うん、ありがとう。私も大好きよ、沙耶。所で何の話だった？」

「お仕事の話だよ、奏お姉ちゃん。今日みたいな日は休む事も大事って伯父さん言うよね。でも、」

言われ、頭を切り替えて考えだす。

私達は伯父のはからいにより、自警団に預けられた最新の航空機動外装骨格をほぼ私物として運用できる権限の代わりに、自警団での活動、外装骨格を使つての治安や工事、街で起こる様々な騒動に対して”手伝い”をするという事になっている。無論伯父の”商会”を通してなら幾つかの”依頼”で個人の為に働く事になる。そして私達は伯父の庇護をうけながらも”依頼”と少額だが出る”お手伝い”による収入を生活費に充てて生活している。無論目指すは伯父に対してきつちりと恩は返せるようになりたいと思う。けれど

「そうすると。ますます独立が遅れるのよねえー。独立」

私達は二人で伯父の保護かを半歩離れて二人暮らしをしている。お父さんとお母さんは別の所で働いているからだ。あの人達には別に沢山のやることがある。それは”私達”と”羽を持つ人達”、双方で考えなきやいけない重要な問題だ。お父さんとお母さんの背中に追いつくためにも、私達は頑張らないといけない。その為にはまず独立する事だ。伯父さんは親切だが甘くは無い。その意味では最高の環境とも言えたし。

「けど、伯父さんもあんな人だけど、色んな勉強の合間に言ったよね”働かせるのは君達自身が将来生きていく為の訓練。それより重要なのは”」

「そうね。”お前たちが強く、賢く、美しく、そしてタフになる事”」

「タフに生きるにや力がある”」

「”まずはメシだ”」

言って二人で笑いあう。

無頼漢に見えて慎重。

鋼の恣意と氷の視線。

老境老練。

地上の道理の通じぬ天空の世界において、しかし君臨する商会の首領。しかしたんにそう、呼ぶにはこの言葉に意味されるその人物は意外なほどの何かを覗かせる”あの人”は時折そう言って、無理やりに私達の鍛錬を時に無理に遮ってでも同じ食卓に着かせるのだ。今は遠くの島で、月に一度の文通と商会の支部を通じての連絡が関の山だけでも、きつと”あの人”は怒るだろうな、そんな直感が言葉にするまでも無く優しい予感となって二人の間を抜けた。

「じゃあ今日は商会にはお休みを言っておくね」笑いあう「反省会

の方にも顔を出しておく？ 折角今日は休むって決めたんだし」

「うーん、でも一応明日のご飯はでも買いに行かないと」

「お塩もそろそろ買い足さないといけないかしら」

「そう言えば居間の電球が切れかけてて」

「授業に使うノート切らしてて」

「……」

「……」

苦笑いを浮かべて笑った。

「なんとというか……私達……」

「働き者さんなのは良い事だとおもうよ？」

「本当にそうだといんだけどね。本当に、誰か良い人がいればいいんだけどねえ」

「ええっ、まさかお姉さん、あの人の事……!？」

何か嫌な予感がする。

「ちよっ、ちよっ、待って待って。あの人って誰!? まさかッ」

脳裏をよぎるのはアイツの姿。

考えながら見ると、すぐ背後から声がかかった。

「おいおいおい、エイワスの姉ちゃんよオ。何か良い感じにふざけてんなア。どうしたよ、お二人さん」

振り返るとそこには見慣れた……全身を色とりどりのペイント弾に行動不能を意味するラメのようにきらめくフロジストンが全身に貼りついて全身を一個の前衛芸術に変えた男がいた、妙な笑顔で。キモッ。

「……ないわね」

「うわぁ……」

やっぱり、あのトップガン程度は顔が欲しい。出なくても甲斐性か、あるいは不可能を可能にするだけの財力が……、

「オイオイ、なんか知らんがリアル傷つくぞ、俺」

しょうがないじゃない、せめて顔洗って出直しなさい。

「てちげえよ。街に繰り出して遊ぼうぜって言ってんだよ、オレは」

「あら、一緒にツルんでダラダラやるくらいいつもの事じゃないの。反省会に顔出すんなら一緒にでもなんでも変わんないでしょう?」

「イ、イヤ……実は、オレ、街に居る知り合いに、彼女見せてやるって約束しちゃったんだよ、知り合いによろ」

頭を下げ……、いやいやいやこれは。

「土、土下座……」

「本当にツ、頼むツ」

怪人虹色男が土下座、彼女のフリをしてくれと土下座。

夕日を反射して小金色に輝く肩のあたりがプルプルと悲しげにゆれていた。

……無様ね。

思って鼻で笑い、このこの世でもっともチンチクリンな能動的鏡面反射物体を見下ろす。きつとアレなのだ。この生き物は一生をこつやつてはいつくばって平身低頭、美味鬼にあつては泣いて懇願し、仏にあつては土下座してすり寄りこの私を足ふきマットにぞ……とか言ってお金をもらって暮らすに違いない。

「ふう、しょうがないわねえ」

しかしこの足ふきマットにも足ふきマット程度の人権と尊厳があるはずだし、火鏡を見る沙耶の目が同情の色に染まっている。

……。

意を決して言った。

「しょうがないわねえ私が「えつと……火鏡君。私でよければ」そう私が」

見た。

沙耶が小首を傾げ、掌を小さく拳手の形にしていた。

「つてえええ、ちよつとまてえつえええええ」

と、いきなり奏は上を向いて叫んだ。どうしたんだろうか、一体。

気にもなるがあまりの形相に近寄りがたい。というより、

「ホンマありがとうな、沙耶」

「う、うん。別に大丈夫だよ、本当に」

相手の顔を伺うと、半歩下がっていった。

「というか何が？」

「寄るな、貴様、寄るな、私の、沙耶に、貴様に、これから下す、天罰を、天宙を、ウエツホゲフンゲフン……ああ息苦しい」

いや、そこまでしてしゃべることないだろう普通。

「あんたが普通とかいつかああ」

「べ、別にオレがどうかイイじゃねエかよウ。というか沙耶こそいいのかよ」

そつだ。一番大事な事を聞くのを忘れていた。

「お前、立花と付き合ってたんじゃなかったのか？」

次の瞬間、腰を入れて放たれた蹴りが火鏡の脳を揺らす。

「いやあああああつああ、沙耶、本当なの!？」

「いや。だって、よくあいつがよオ、あの立花にモーションかけられて……」

「あんたには聞いてない!」

もう一発が入った。

「次、許可なく喋ったら殺ス! どうなの、アイツ……ッ!」

「ちよつ、ちよつとまってお姉さん。あの人とは別に何度か一緒に食事連れて行ってもらっただけの関係で、」

「お食事イ!?! 何、何料理!?!」

「しいて言つなら精進料理を」

「日本料理?」

「ハッ、そういえば出汁巻きがおいしかったのオ」

「あんたには聞いてない!?!」

「あ、えつと、私は茶碗蒸し……」

「ふーふーしたのねツ！ そうなのねツ！？」

「そもそも姉さんだつて模擬戦の前に、あの人の事気にしてたじゃないですか！」

「か、関係ないのよあんな奴！ それよりアイツよアイツ」

「あのサボリ、立花、あの喪服女　　！」

「失せる、立花！」

双方同時に放たれた一撃が、フロジストンの光片をまき散らしながら放たれた。単純真上から振り下ろされた刀の一撃を挟み込むようにして交差した両腕が食い止める。本らになら進路上の両腕を両断してサナテスクの額を立ち割っていた刀の軌道は、しかし両腕から発生する不可視の障壁によって止められていた。

耳障りな、干渉音　　押し込まれる刀身と障壁のソレ　　をバツクに、叫ぶ。

「サナテスク、君、いい加減うつとおしいよ」
言つて舞い散る光片の花弁越しに睨みつける。必殺の一太刀は、サナテスクの袖口にしまわれていた大量の符が燃焼し、生み出される高濃度のフロジストン障壁によって食い止められている。

仕方なしに、全身の力を刀に込め押し込むと、繊維質を断つ音がして、障壁が確かに切り裂かれ、ジリジリと刀身が腕めがけて下がって行く。微かにサナテスクが下がった。イケる。確信と共に更に力を込めて刀を押し込んだ。頬がゆがむのを感じる。愉悦。障壁が切り裂かれ、自分に屈服する時に感じる物だ。

そして刀身が半ばまで障壁を切り裂いた。

サナテスクの袖口から舞い飛ぶ光片には焼け飛んだ符の紙部分が大部分を占めるようになり、つまり、相手の障壁の残しが少ないと言う事。後少しで押し込める、という事に迫りつつある。

脳を焼くほの暗い炎に、身をまかせようとしたその時、溜めていた右の蹴りが跳ね上がってきた。

フェイントを交え、直下降の線を描いた蹴り、狙いは口。

特に気にするまでも無く、曲げた膝で受け、相手の足を弾く。

交差した腕を掲げ、かつ身を低く。滑り込むようにしてサナテスクがタツクルを狙ってくる。

問題ない。微かに下がり、逆に力で押し込むようにして、相手を押し潰す格好に。

膝を着いた。

愉悦。脳のシナプスで快樂の花が咲き、恍惚とした感情が目の前で火花を上げる。

とその瞬間、地面についた膝が前に突きだされ、そのまま前へと身体を押し進める。

「……………何ッ……………!？」

その瞬間、目の前には白く燐光を発する歯車があった。車輪と評すべきか。それが突如として形態を変えた。二重に重ねられた円形を貫く放射状の幾つもの線が、突如としてその大きさを換え、回転する。

「アイコン……………ッ！ 鋸見たいに、切り裂くのが君のそれかい？ ……

…そういうえば、今日はやけに調子がよさそうだったね。……………そのあたらしいおもちゃのおかげという訳かな」

反応は咄嗟。

後数センチの所まで切り開いた障壁を諦め、咄嗟に数歩あとじさる。

「フン……………貴君には、できるなら正面から勝ちたかったがな。こうもなれば仕方あるまいよ」

「ソレ、ボクに勝てるって言ってるように聞こえるけど」

反応し、手首のスナップを使い、袖口の棒手裏剣を取り出す。接
近してくるなら”手裏” 剣による不意打ち。

そう決めて振りかぶった右腕を、しかし別の何かか捕えた。

白い光を放つ、鎖だ。

咄嗟に手裏剣を逆手に握りそして、

展開開始（後書き）

途中です。

在る程度の物ができたら、この中途半端な所に続きを出します。

中途半端誠に申し訳ない > m () m <

見て下さったみなみな様に、土下座する勢いで、次の所を頑張つ書きますので、どうか見捨てないでくださいお願いします（・・メ）

マテ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3998w/>

虚空のランサー

2011年11月28日00時45分発行